

● シリーズ 私の見た日本 Vol.205

日本で経験した人から縁に繋がる世界

柳 尚吾 (Sang-oh RYU)

2010年4月、大阪大学大学院の博士後期課程に入学し、2013年博士号を取得。その後、建築設計事務所2年、大学助手の経験をし、2016年からは韓国の公社で5年間ユニバーサルデザイン関連研究や事業を行った。2021年から現在、関西学院大学建築学部の准教授として教育や研究をしている



2010年に来日して留学生活が始まった。3年間の学生生活と建築設計事務所2年、大学事務で1年半いて、韓国での5年の経験の後、今に至る。今回は主に学生だった私の見た日本の話である。

関西、研究室

私が見た初めての日本は関西、大阪であった。日本の留学生活で、第一の課題は日本語だった。留学前に日本語能力試験1級を取ったので、すぐ慣れると思ったが、発音や言い方、癖などで聞き取れないことが多かった。それに、関西弁に慣れることが大変だった。でも、実際にしゃべってみると標準語より喋りやすいと思った。私の関西、大阪に対する思いは関西弁から始まり、関西弁のおかげで関西、大阪が好きになった。

また、当時の研究室での人とのつながりは、その時の私にとってかけがえのないものであった。毎日同じ時間を過ごした研究室の仲間たちと悩みごとを相談したり、話したり

することができ、このことが私にとって温かく感じた。研究室で過ごした時間は私の日本での大切な時間であり、日本の文化にもなった。お互いに共有する時間が増えていくと人との関係は強くなる。どこでも同じかもしれないが、私ができることを感じられたのは日本で過ごした日々であった。

私の日本に対するイメージと大阪は少し違った。大阪は静かな日本の中で一番うるさいかもしれない。大阪の人は自分の感情に素直だ。人に優しいし、人に声を掛ける。食べ物と一緒に食べ、酒を飲むのが大好きだ。私はそんな大阪だから居心地がよかった。故郷である韓国の街と似たものを感じた。私は留学してすぐの頃、大阪の北部にある大阪大学の近くで一人暮らしをした。この場所はソウルから来た自分にとって雰囲気が暗い、静かで、人がいない。今はそのような環境の方が住みやすいと思うが、その時の私には不便な場所の思いの方が大きかった。研究室の学生や先生以外は人と会う機会が少

なかったし、自分から他の韓国人留学生に会う余裕もなかった。そんな時期に大阪市南森町の外国人寮に1年間住みはじめ、電車通学が始まった。堺筋線の商店街が寮の近くにあって、近所はいつも賑やかで活気があった。繁華街とも近いので、活気のある日本を感じることができて、その時期は本当に良かったと思う。

JAPAN TENT

2010年JAPAN TENTという石川県に留学生を招いて開催する国際交流イベントに参加した。私は加賀と金沢の2つのホストファミリーと出会い、日本の文化を体験し、他の留学生とも話すことができた。ホストファミリーは家族のようで日本の民家での生活は本当に温かく感じた。世界中、人はどこでも同じだ。お互いのことをよく知らないと相手に対し勝手な想像し、思い込みで相手に接してしまう場合もある。JAPAN TENTは私も留学生でありながら、他の外国人留学生との出会いがたくさ

んあった。その人たちとの出会いによりいろいろな世界の話を知ることができ、このイベントを通して世界が見えたと感じた。そして、日本の人の優しさや純粋さを石川県の田舎で学んだ。今でもその時の経験や出会った人のことを思い出す。そんな思い出の石川県の大地に自分の家族と一緒にいつか行きたい。

その後、大阪大学での安藤忠雄さんの講演会で"日本の青年はもっと外にでるべきだ"と話があった。外に出ることは色んな人に出会い、色んな考えが出来るようになる。机の上での本の学びだけではなくその場所で得られることがあると感じた。

地震

2011年東日本大震災が起り、そして、津波という恐ろしい自然と出会った。韓国では地震の経験をしたことがないし、韓国は災害より、戦争への備えが基本になっている。日本と韓国はいつ起こるかかわからない自然災害と敵の襲撃にいつも心を構えておく意味では二つの国は似ているかもしれない。私は関西にいたため、関東のように大きな被害はなかったが、頻繁に起きる地震が少し怖かった。しかし、関東と比べると関西は落ち着いていた。何もなかった雰囲気の人たちを見ながら、亡くなった人々を考えるとしばらく、私は笑うこともできなかった。日本は災害で多くの人々が苦しむ国であるが、この災害を通して多くの人々が亡くなる中、泣かないように頑張る人々、家族がよく見られた。こんな経験をして他の人に自分の感情を見せ

ないことが日本人の生き様だと感じ、彼らが我慢している様子を考えると、私は何度も涙を流した。彼らは身近な人の前でないと自分の感情を見せない、表現しない。こんな大きな被害があっても人の泣き声あまり聞かなくてこない。でも私には彼らの気持ちがなぜか心に響いてくるので、涙がその日からしばらく止まらなかった。だが、日本の人々は悲しみを表情に出すことなく静かに過ごしていたので、私も静かに泣いた。

大地震の後、韓国では北朝鮮との危機があった。その時のことを考えてみると韓国と日本の雰囲気は全く異なった。地震の時、日本は落ち着いた雰囲気であったが、韓国の問題に対しては大きく反応をした。大きな地震の時にも、もちろん色んな人への被害はあったが、関西に住んだ私からみるとどちらかと言うと日常にそこまでの大きな影響はなかった。逆に韓国でミサイル事件が起きた時、日本のテレビからは朝鮮半島に戦争が起こったような雰囲気、周りからも心配の声がかげられた。このことを通して一番近い国でありながらお互いどのくらい分かり、理解しているのかに対して考えるようになった。

新旧

日本には新しいものもあるが、古いものもたくさんあり、昔の文化やものがよく保存されている。都会でも昔の日本を経験することができ、少し都会から離れると綺麗な昔の街が広がる。昔と言っても古くは行きたくない場所ではなく、綺麗に行きたくなる場所だ。

その雰囲気があるおかげで、日本は世界中の人がまた来たい国になった理由だと思える。保存と発展は反動的な進み方であるため、うまく混じることが難しい。開発で前に進むことで一杯だった韓国は近年に入り、以前の姿を復元する動きや声が高まっている。歴史は国民には根本的な心であり、それをみる人にはその心を感じることができるようになる。日本の人は歴史が近くに感じられるところで生きている。その良さを活かしているところは日本の一番の力ではないかと思う。

人、そして縁

私の留学生の時期は入学から卒業まで3年半で、今考えると短いと感じるが、その時は早く卒業したくて焦り、余裕がなかった。しかし、日本で日本の方々から色んなことを教えてもらい、助けてもらったりと本当にいい時間だった。卒業の後、韓国へ戻り、5年を経て、今は関西学院大学で学生に建築(ユニバーサルデザイン、バリアフリー)を教えている。自分の研究テーマはユニバーサルデザインであるため、人をみる、人に聞くことが癖になっている。研究だけではなく学校教育でも人が大事であることを第一に話そうとしている。建築は空間を作る前に人のことを考える仕事であると教えている。私は日本の留学も留学先が大阪になったのも、今、日本の大学で学生を教えているのも全てが"人"であり、"縁"だと思う。その縁はこれからも続き、私の見ている日本がこれからどうなるのか楽しみだ。



左上/大阪の風景 中上/研究室の様子 右上/卒業式 下/JAPAN TENTでの体験



新と旧が混じり合った日本の風景